

P1-070

発話障害を抱える子どもの文献検討－思いに着目して－

伊藤 千紘¹、宮崎 つた子²

¹名古屋大学医学部附属病院

²三重県立看護大学

【目的】

発話障害のうち吃音や選択性緘黙は発症の大部分が幼児期であり、失語症や構音障害も先天的なものや発達状況によっては幼少期に発症する。好発時期が8～15歳である社交不安障害の発症のきっかけには、成長に伴い発話を回避することが挙げられる。このことから発話障害や社交不安障害の好発時期である子どもへの関わりが重要だといえる。そこで、発話障害を抱える子どもの思いを、治療前・中・後に分けて明らかにすることを目的とした。

【方法】

文献の抽出は医学中央雑誌Web版を用いた。1984年～2018年の検索期間でキーワードが「発話障害」「感情or患者心理or語り」「心理」「精神科or精神」「支援」「困難」の原著論文は27文献抽出された。分析は収集した文献について発表年を5年ごとに区切り、対象者の年齢、障害の種類、研究方法についてそれぞれ集計した。発話障害を抱える子どもの思いに関しては、文献における対象箇所を切り取り、治療前・中・後の時期に分類したのち、類似性に基づき分類・命名し〔サブカテゴリー〕【カテゴリー】化した。

【結果および考察】

発話障害を抱える子どもが思いを抱いた年齢は、「乳幼児」3件、「小学生」9件、「中学生」5件、「高校生」2件、「通して」8件であった。対象文献における発話障害は、「吃音」15件、「失語症」1件、「構音障害」0件、「選択性緘黙」11件であった。子どもの発話障害の文献における研究方法は、「質問紙」7件、「面接」3件、「事例」17件であった。発話障害を抱える子どもの思いを切り取った文献データ202件について整理すると、治療前が131件、治療中が62件、治療後が9件に分類された。カテゴリーは〔発話機会への不安・恐怖・緊張〕等のサブカテゴリーから【気持ち】、【理解不足による問題の軽視】等のサブカテゴリーから【周囲の人の反応】、その他【対処法】【認知】【自信】【要求水準・理想】【経験】【治療・訓練】【セルフヘルプグループ】という9項目が抽出された。文献検討の結果より、治療前と比べて治療中・後には、治療者との関係構築による発話障害を抱える子どもの思いの言語化や、発話障害の受容といった反応が新たにみられており、治療は精神疾患予防に効果があると考えられた。周囲の人の理解不足による対応で子どもが傷ついている現状から、発話障害を抱える子どもに関わるすべての人の発話障害への理解を深めていく必要性が示唆された。

P1-071

北九州における臨床心理士派遣事業：プレスクールカウンセラーの実践的検討

山本 幸子¹、川端 悠子²

¹キッズ・キッズ折尾保育園

²社会福祉法人ルピナス

【目的】

福岡県北九州市では、保育園などで発達が気になる園児がいる場合に、保護者の了承を得て専門家を派遣する「地域支援」という制度がある。しかし、気になる子どもの保護者に専門家派遣の了承を得ることは難しいケースもあり、園で対応を抱え込んでしまうという問題がおこる。そこで、他県で行われている、保護者からの申し出がなくても定期的に心理士を園に派遣する事業を北九州市内でテストとして行った。北九州では、心理士によるどのような保育への支援が必要か、実践的に検討した。仮説として、発達や育児に不安を持つ保護者面接のニーズが高いと考えた。

【方法】

2018年9月から、月一度程度、計6回、北九州市内のA保育園に臨床心理士を派遣した。まずは保育士への事前アンケートをおこなった。その後、心理士の訪問を保護者へ手紙で告知し、気になる親には保育士から直接声かけをして面談を促した。また心理士は、保育士からの申し出により、気になる児の観察と相談を行った。

【結果】

保育士への事前アンケートでは、心理士に対する期待が高い事が示された。しかし手紙と保育士の促しによる、気になる児の保護者を心理士につなぐことは、仮説とは異なり数例で止まった。また、心理士派遣3回目、保育士と保護者からの相談の依頼が一旦なくなり、心理士の活用への保育士と保護者のハードルの高さが課題として上がった。その後、依頼がなくても心理士が各教室に見学に行き、その場で保育士からの相談を受ける型に支援を変更した。すると心理士に個別に相談を依頼するまでもないが、集団の中で配慮を必要とする、こだわりがある児やコミュニケーション面で気になる児の対応について助言を求める事例が続いた。

【考察】

仮説とは異なり北九州の心理士派遣は、現場と一緒に見ながら、保育士が相談ができる形式にニーズがあった。派遣申請のハードルを無くし、心理臨床的立場からの助言を受けることで、保育士間での支援の統一や、児の強みを生かす具体的方法を実施するなどの支援的な対応に繋がる事が示された。北九州市の現状では、心理士へ相談するハードルを配慮し、保育士に対して心理臨床的アプローチの助言をメインとした定期的派遣が有効である事が示唆された。